資　料

認知症高齢者グループホームにおける地域住民およびボランティアとの交流に関する調査
～ 2008年と2012年のアンケート調査の比較～

納戸美佐子*　野瀬真由美**　上城　憲司***
谷川　良博****　中村　貴志*****

＜要　旨＞

本研究は、2008年にアンケート調査を実施した地域の認知症高齢者グループホームを対象に同様の調査を行うことにより、地域住民やボランティアとの交流状況の変化について検討した。その結果、地域住民との交流は、地域行事、散歩や買い物を通して関わることが多いものの、グループホームを訪問するパターンでの交流が増加していた。また、ボランティアの受け入れに対して前向きに検討しているグループホームが多いが、受け入れによる不安を感じているグループホームも増加していた。今後、認知症高齢者の生活の質が向上するような地域住民との交流の方法やボランティアの受け入れ体制について検討していくことが必要である。

キーワード：認知症高齢者、グループホーム、ボランティア、地域住民、アンケート

Ⅰ．はじめに

わが国における高齢者は急速に増加し、平成22年における65歳以上の高齢者人口は、過去最高の2958万人となり、高齢化率も23.1%となった[1)]。また、高齢者の増加に伴い、認知症高齢者の数も増加傾向にあり、平成22年は280万人、平成27年345万人、平成32年410万人と推計されている[2)]。

このようななか、2000年の介護保険制度導入後、認知症高齢者グループホーム（以下、グループホーム）は、認知症高齢者の生活の場として急速に増加している。現在では、グループホームは、地域密着型サービスのひとつと位置づけられている。近年、グループホームのサービスの質を測るキーワードとして「地域」が注目されている[3)]。また、グループホームの自己評価および外部評価においても、「地域との連携」がサービス評価の項目となっている。これらのことからも、グループホームにおいては、入居している認知症高齢者が地域と関わりながら生活できるような取り組みを実施していくことが重要であると考えられる。しかしながら、地域との関わりが重要視されながらも、地域とグループホームとの交流や関係性は少ない実態が報告されている[4)]。

我々は、先行研究[5)]において、グループホームの地域交流に関するアンケート調査を実施し、地域住民やボランティアとの交流の状況について検討した。その結果、地域行事や散歩・買い物など、認知症高齢者と職員が地域に出向くパターンでの交流は成立しやすいことが示された。また、ボランティアとの交流に関しては、日常生活におけるボランティアに対する期待は高いものの、現状としてはイベントなどを通しての交流が中心であることが示された。

本研究では、先行研究を実施した地域のグループホームを対象に同様のアンケート調査を行うことにより、地域住民やボランティアとの交流状況の変化について検討することを目的とした。

*　西南女学院大学保健福祉学部福祉学科　講師
**　筑波大学大学院人間総合科学研究科　大学院生
***　西九州大学リハビリテーション学部作業療法学専攻　准教授
****　東郷外科はつらつデイケア　作業療法士
*****　福岡教育大学教育学部特別支援教育講座　教授

Ⅱ．研究方法

１．方法

１）調査対象と調査方法

福岡県認知症高齢者グループホーム協議会Xブロック（以下、Xブロック）に加盟しているグループホームを対象としてアンケート調査を実施した。

１回目の調査は、2008年７月に開催されたXブロック研修会においてアンケート調査への協力を依頼し、19件を対象に研修会会場にて実施した。さらに、Xブロックに加盟しており、研修会に欠席した23件に対しては郵送法によるアンケート調査を実施した。本研究においては、研修会会場による調査および郵送法による調査において回答が得られた35件（回収率83.3%）を分析対象とした。

２回目の調査は、2012年５月に開催されたXブロック研修会においてアンケート調査への協力を依頼し、13件を対象に研修会会場にて実施した。さらに、Xブロックに加盟しており、研修会に欠席した23件に対しては郵送法によるアンケート調査を実施した。本研究においては、研修会会場による調査および郵送法による調査において回答が得られた30件（回収率83.3%）を分析対象とした。

２）調査時期

１回目の調査は、2008年７月～2008年10月において実施した。２回目の調査は、2012年５月～2012年７月において実施した。

３）調査内容

アンケート用紙は、先行研究[4)]をもとに独自に作成した。アンケート用紙の質問項目は､「グループホームおよび入居者の状況に関する項目」４項目､「グループホームが設置されている地域の状況に関する項目」２項目、「関連施設機関・地域住民との交流に関する項目」２項目、「ボランティア受け入れに関する項目」７項目とした。

また、２回目の調査では、１回目の調査で使用した項目に「ボランティアを継続的に受け入れるために必要なサポート」１項目を追加した。

今回は、地域住民やボランティアとの交流状況の変化について検討することを目的としているため、「関連施設機関･地域住民との交流に関する項目」２項目、「ボランティア受け入れに関する項目」７項目を分析対象とした。

２．倫理的配慮

アンケート調査は、無記名で実施した。2012年に実施した研修会会場での調査では、アンケート調査の趣旨について実施者が説明し、後日、郵便にてアンケート用紙を返送してもらった。なお、その場での提出を申し出られたグループホームに関しては、研修会の主催者にアンケート用紙を回収してもらった。

2008年の調査に関しては、久留米大学御井学舎倫理委員会、2012年の調査に関しては、西南女学院大学の倫理審査委員会の承認を得た。

Ⅲ．結果

１．関連施設機関・地域住民との交流に関する項目

１）関連施設機関との交流

関連施設機関との交流状況を３カテゴリー（①併設施設との交流がある、②他施設・他機関との交流がある、③併設施設・他施設・他機関との交流がある、④交流はない）に分類した。

１回目は､未記入１件を除く34件を分析対象とした。２回目は、未記入１件を除く29件を分析対象とした。その結果、１回目に比べ２回目においては､「他施設･他機関との交流がある」「併設施設・他施設・他機関との交流がある」が増加し､「併設施設との交流がある」「交流はない」が減少した（図１）。

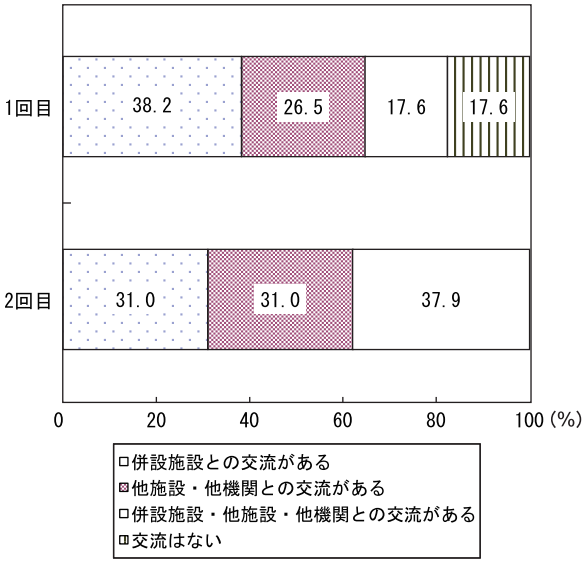

図１　関連施設機関との交流状況

２）地域住民との交流

地域住民との交流の状況を８カテゴリー（①グループホーム主催のイベントでの交流がある、②地域行事への参加による交流がある、③ボランティア団体による訪問がある、④保育園児・小中高校生などの訪問がある、⑤散歩・買い物などの外出時に交流がある、⑥日常的な訪問がある、⑦特にない、⑧その他）に分類した。

１回目は、35件を分析対象とした。２回目は、30件を分析対象とした。この項目については、複数回答可とした。その結果、１回目および２回目においても「地域行事への参加による交流がある」が最も多かった。また、１回目に比べ２回目においては、「グループホーム主催のイベントでの交流がある」「ボランティア団体による訪問がある」「日常的な訪問がある」が増加し、「地域行事への参加による交流がある」「保育園児・小中高生などの訪問がある」「散歩・買物などの外出時に交流がある」が減少した（表１）。

表１　地域住民との交流の状況

単位：％

	１回目	２回目
グループホーム主催のイベントでの交流がある	31.4	36.7
地域行事への参加による交流がある	82.9	73.3
ボランティア団体による訪問がある	25.7	46.7
保育園児・小中高生などの訪問がある	45.7	43.3
散歩・買い物などの外出時に交流がある	71.4	50.0
日常的な訪問がある	11.4	20.0
特にない	2.9	0.0
その他	5.7	0.0

２．ボランティアに関する項目

１）ボランティアの受入れ状況

ボランティアの受け入れ状況を４カテゴリー（①イベント時のみ受け入れている、②日常的に受け入れている、③検討中、④受け入れていない）に分類した。

１回目は、35件を分析対象とした。２回目は、未記入1件を除く29件を分析対象とした。その結果、「イベント時のみ受け入れ」「日常的に受け入れている」が増加し、「検討中」「受け入れていない」が減少した（図２）。

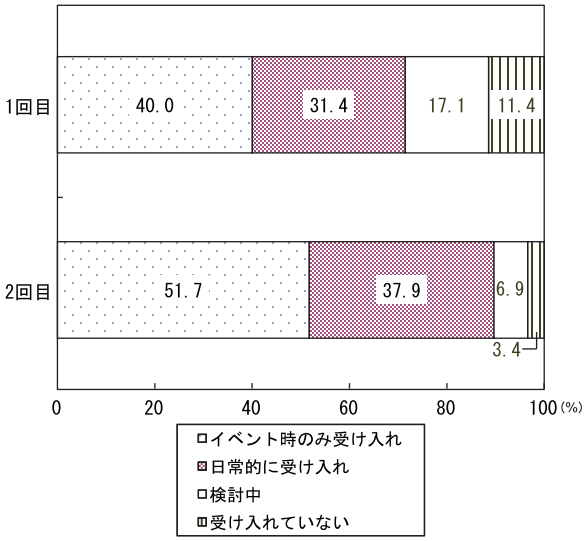

図２　ボランティアの受け入れ状況

２）ボランティアへの依頼内容

前項の質問項目において「①イベント時のみ受け入れている」および「②日常的に受け入れている」グループホームを対象に、ボランティアへの依頼内容について質問を行った。ボランティアへの依頼内容を10カテゴリー（①イベントへの参加、②業務の手伝い、③手芸・習字などの指導、④入居者の話し相手、⑤入居者の介助、⑥園芸の手伝い、⑦散歩の付き添い、⑧通院への付き添い、⑨外出への同行、⑩その他）に分類した。

１回目は、未記入１件を除く24件を対象とした。２回目は、26件を対象とした。この項目については、複数回答可とした。その結果、１回目および２回目においても「イベントへの参加」が最も多く、次いで、「入居者の話し相手」が多かった。１回目に比べ２回目においては、「業務の手伝い」「手芸・習字などの指導」「入居者の話し相手」「園芸の手伝い」「外出への同行」が増加し、「入居者の介助」「散歩の付き添い」が減少した（図３）。

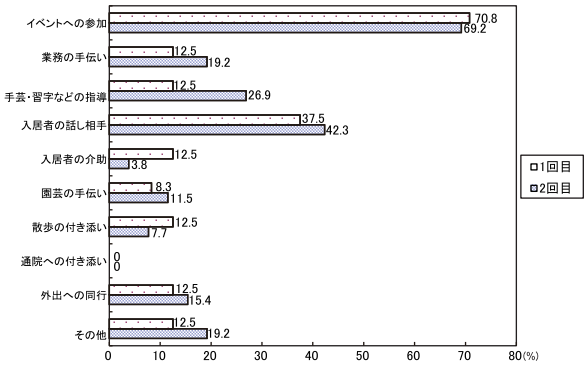

図３　ボランティアへの依頼内容

3）ボランティアの受け入れまでの経緯

前項の質問項目において「①イベント時のみ受け入れている」および「②日常的に受け入れている」グループホームを対象にボランティアの受け入れまでの経緯について質問を行った。紹介先を7カテゴリー（①行政・公的機関からの紹介、②ボランティア団体からの紹介、③知人からの紹介、④職員からの紹介、⑤ボランティア個人からの依頼、⑥民生委員・町内会長など地域役員からの紹介、⑦その他）に分類した。

１回目は、未記入１件を除く24件を対象とした。２回目は、未記入５件を除く21件を対象とした。この項目については、複数回答可とした。その結果、１回目は「知人からの紹介」が最も多かったが、２回目においては「職員からの紹介」が最も多かった。１回目に比べ２回目においては、「行政・公的機関からの紹介」「職員からの紹介」「地域役員からの紹介」が増加し、「ボランティア団体からの紹介」「知人からの紹介」が減少した（図４）。

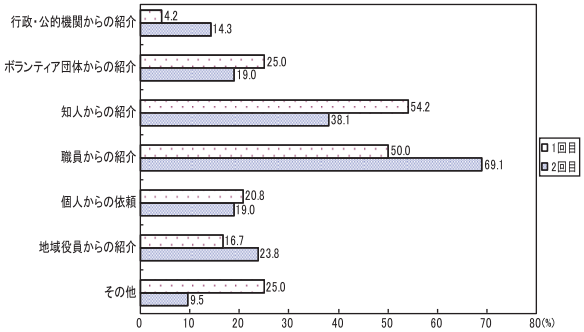

図４　ボランティア受け入れまでの経緯

4）ボランティアの受け入れに対する不安

ボランティアの受け入れに対する不安の有無について質問を行った。１回目は未記入２件を除く33件を対象とした。２回目は、未記入４件を除く26件を対象とした。その結果、１回目においては、「不安なし」72.7%、「不安あり」27.3%であった。２回目においては、「不安なし」57.7%、「不安あり」42.3%であった。

さらに、「不安あり」と回答したグループホームを対象に、具体的な不安要因について質問を行った。不安要因を８カテゴリー（①受け入れによる入居者の混乱、②個人情報の流出、③家族からの理解が得られない、④職員からの理解が得られない、⑤ボランティアの受け入れによる業務の増加、⑥ボランティアへの指導がしにくい、⑦トラブルがあったときの対応が難しい、⑧その他）に分類した。この項目については、複数回答可とした。その結果、１回目に比べ２回目においては、「受け入れによる入居者の混乱」「トラブルがあったときの対応が難しい」が減少し、「個人情報の流出」「受け入れによる業務の増加」「ボランティアへの指導がしにくい」が増加していた（表２）。

表２　ボランティア受け入れによる不安要因

単位：%

	１回目	２回目
受入れによる入居者の混乱	66.3	27.3
個人情報の流出	11.1	36.4
家族からの理解が得られない	0.0	0.0
職員からの理解が得られない	0.0	0.0
受入れによる業務の増加	0.0	18.2
ボランティアへの指導がしにくい	55.6	72.7
トラブルがあったときの対応が難しい	55.6	45.5
その他	0.0	0.0

5）ボランティア受け入れによるトラブル等の発生

過去にボランティアを受け入れたことによるトラブルや困ったことの発生状況の有無に関して質問を行った。トラブルがあったグループホームは、具体例を記入してもらった。

１回目は、未記入４件を除く31件を対象に分析を行った。２回目は、未記入２件を除く28件を対象に分析を行った。その結果、「トラブルあり」と回答したグループホームは、１回目は6.5%、２回目は、10.7%であった。具体的なトラブルの内容に関して、１回目は「イベント後に入居者が落ち着かなくなり帰宅願望が強くなった」「学生が元気すぎて入居者が疲れた」、２回目は「家族の不安をあおるような発言があった」という内容であった。

6）日常生活におけるボランティアの受け入れ状況・今後のボランティアの受け入れ予定

普段の日常生活におけるボランティアの受け入れ状況や今後の受け入れ予定に関して、グループホームの方針を６カテゴリー（①日常的に受け入れを行っている、②受け入れ状況が整えば受け入れ可能、③検討中、④ボランティアを受け入れたいが受け入れ方・調整方法が分からない、⑤受け入れる予定はない、⑥その他）に分類した。

１回目は、未記入３件を除く32件を対象とした。２回目は、未記入１件を除く29件を対象とした。その結果、「日常的に受け入れを行っている」「検討中」が減

少し、「受け入れが整えば受け入れ可能」「受け入れたいが受け入れ方・調整方法が分からない」が増加した（図５）。

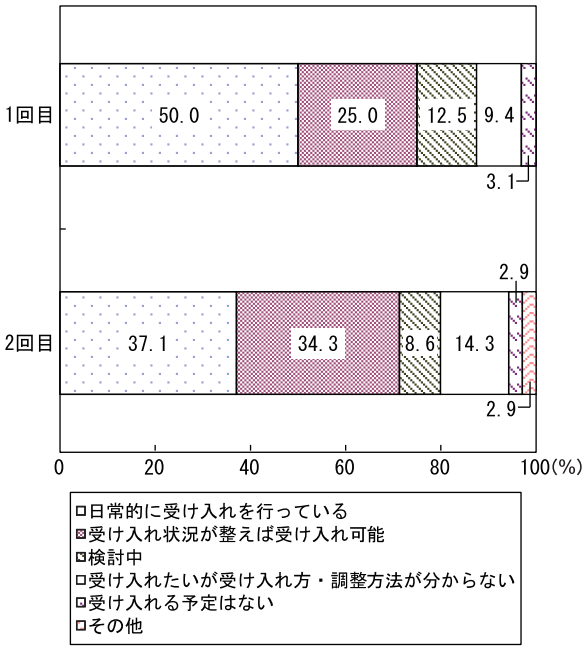

図５　ボランティア受け入れに関する方針

７）今後、ボランティアに期待すること・依頼したいこと

今後、ボランティアに期待すること・依頼したいことについて質問を行った。依頼内容を11カテゴリー（①イベントへの参加、②業務の手伝い、③手芸・習字などの指導、④入居者の話し相手、⑤入居者の介助、⑥園芸の手伝い、⑦散歩の付き添い、⑧通院への付き添い、⑨外出への同行、⑩特にない、⑪その他）に分類した。

１回目は、未記入1件を除く34件を分析対象とした。２回目は、未記入１件を除く29件を分析対象とした。その結果、１回目および２回目においても「入居者の話し相手」が最も多く、次いで「イベントへの参加」「散歩の付き添い」の順であった。1回目に比べ２回目は、「イベントへの参加」「業務の手伝い」「通院への付き添い」「特にない」が増加し、「手芸・習字などの指導」「入居者の話し相手」「入居者の介助」「園芸の手伝い」「散歩の付き添い」「外出への同行」が減少した（図６）。

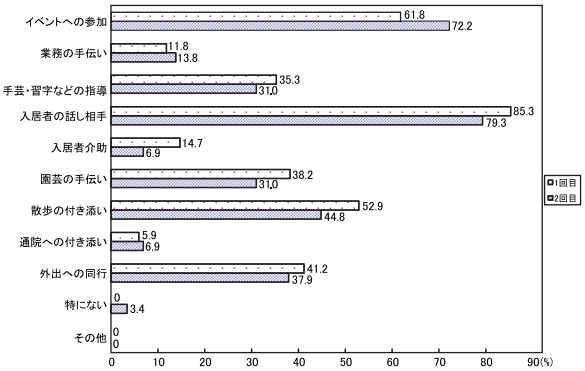

図６　今後、ボランティアに期待すること・依頼したいこと

Ⅳ．考察

１．関連施設機関・地域住民との交流について

関連施設・機関との交流において、１回目に比べ２回目は、他施設・他機関との交流や併設施設・他施設・他機関との交流が増加し、他の施設等と交流がないグループホームはみられなかった。この結果から、併設施設だけでなく、多様な施設等との交流が行われるようになってきたことが分かった。

地域住民との交流に関して、１回目および２回目においても地域行事や散歩・買い物による交流が多くみられたが、１回目と２回目を比較すると、地域行事や散歩・買い物での交流の割合は、減少していた。一方、グループホーム主催のイベントでの交流、ボランティア団体による訪問や日常的な訪問は増加していた。山口ら[3]は、グループホームと地域との関係において、グループホームでは「地域に出て行く」後に「地域が入ってくる」ようになると指摘している。本研究においても、１回目に比べ２回目は、訪問による交流が増えていたことから、山口ら[3]の研究結果を支持する内容であった。また、買い物や散歩は、それらを通して地域住民との新たな出会いや交流が生まれ、地域における人間関係の構築に役立つことが指摘されている[3]。今後、地域住民との交流を発展させていくためには、入居者が地域に出て行くパターンと住民がグループホームを訪問するパターンの両方の交流が必要であり、それらの交流が出来るような対策を検討することが重要である。

２．ボランティアについて

ボランティアの受け入れ状況について、１回目に比べ２回目は、イベント時のみ受け入れと日常的に受け

入れているが増加し、検討中や受け入れていないが減少したことから、グループホームにおけるボランティアの受け入れが積極的に行われるようになってきたと考えられる。ボランティアに依頼している具体的な内容は、イベントへの参加が最も多かったが、１回目に比べ２回目は、手芸・習字などの指導や入居者の話し相手など日常生活で入居者と関わる内容が増加していた。今後、ボランティアに依頼したい内容では、１回目および２回目においても「入居者の話し相手」が最も多かった。１回目に比べ２回目は、イベント時の限られた場面だけでなく、日常生活の中での関わりが増えてきていることが示された。しかしながら、ボランティアであれば誰でもいいわけではなく、入居者への理解や継続性がボランティアには求められている[4)]。また、認知症ケアの視点からも対話の困難な高齢者への働きかけを行うことのできるボランティアの育成が必要であることが指摘[6)]されている。日常的にボランティアを受け入れるためには、認知症高齢者に適切に対応することが出来るボランティアを育成し、ボランティア活動を支援するための具体的な支援体制を整備することが必要である。

今後のボランティアの受け入れ予定については、受け入れ状況が整えば受け入れ可能やボランティアを受け入れたいが、ボランティアの受け入れ方・調整方法が分からないグループホームが増加していた。一方、１回目に比べ２回目においては、ボランティア受け入れに対して不安があるグループホームが増加していた。１回目と２回目の不安要因を比較すると、受け入れによる入居者の混乱やトラブルがあったときの対応が難しいが減少し、個人情報の流出、受け入れによる業務の増加およびボランティアへの指導がしにくいが増加していた。１回目は、ボランティアと入居者との直接的な関わりに関する不安が多かったが、２回目は、ボランティアを受け入れていくための具体的な対応に関する不安が多かった。また、ボランティア受け入れによるトラブルに関しては、１回目に比べ２回目のほうが、トラブルがあったグループホームが若干ではあるが増加していた。高齢者を対象として対話や交流を行うボランティアトレーニングプログラムの効果評価に関する研究において、ボランティアトレーニングプログラムの受講により、高齢者を訪問する際に生じやすいトラブルへの対処法を習得したことがあげられている[6)]。本研究の結果からも、ボランティア受け入れによる不安やトラブルへの対処が急務であると考えられることから、安心してボランティアを受け入れるためのプログラム等をグループホームにおいて検討していくことが必要ある。

また、ボランティア受け入れまでの経緯に関して、１回目に比べ２回目は、職員からの紹介、行政・公的機関からの紹介および地域役員からの紹介が増加していた。行政がボランティアや交流等のソフト面の援助を地域と連携しながら行うことが望まれている[7)]ことから、ボランティア受け入れ後も、これらの機関や地域役員との連携を強化し、グループホームと関連機関等が協同でボランティア活動の支援を実施することが重要であると考えられる。

Ⅴ．おわりに

本研究では、2008年にアンケート調査を実施した地域のグループホームを対象に同様の調査を行うことにより、地域住民やボランティアとの交流状況の変化について検討した。その結果、地域住民との交流に関して、１回目に比べ２回目は、地域住民等がグループホームを訪問するパターンでの交流が増加しており、交流パターンが多様化している傾向がみられた。また、ボランティアとの交流に対して前向きに検討しているグループホームが多かったが、一方で、ボランティア受け入れに対する不安を感じているグループホームが増加していた。今後、認知症高齢者の生活の質が向上するような地域交流の方法やボランティアの受け入れ体制について検討していくことが必要である。今回の調査は、１回目の調査と同じ地域で実施したが、１回目に実施した全ての施設から回答を得られておらず、限定された地域の報告に留まっている。今後は、様々な地域において同様の調査を実施し、地域の特性に応じた対策を検討していくことが課題である。

謝　辞

本研究を行うにあたり、ご指導ご助言を頂きましたグループホームもみの木小山勝也先生に厚くお礼申し上げます。また、アンケートにご協力を頂きましたグループホーム施設長および職員の方々に感謝致します。

なお、本研究は、JSPS科研費（課題番号:23730565）の助成を受けたものです。

引用文献

1）内閣府：高齢社会白書（平成23年版）．pp.2, 印刷通販．東京, 2011.

2）厚生労働省．認知症高齢者数について．http://www.mhlw.go.jp/（参照2012-09-19）

3）山口宰・越智雅美：地域における認知症高齢者グループホーム－入居者の地域生活と地域におけるグループホームの役割－．地域福祉研究,(34), 104-112（2006）

4）柊崎京子・六反田千恵・新井茂光：痴呆性高齢者グループホームと地域との交流に関する現状と課題．共栄学園短期大学部研究紀要, (21),187-202（2005）.

5）納戸美佐子・上城憲司・中村貴志：福岡県における認知症高齢者グループホームの地域交流に関するアンケート調査．久留米大学文学部紀要社会福祉学科編,(9), 61-68（2009）.

6）保科寧子：高齢者を対象として対話や交流を行うボランティアトレーニングプログラムの効果評価　社会福祉学, 50(4), 122-132（2010）.

7）川岸梅和・染谷佐登子・梅木千恵子：痴呆性高齢者のグループホームと周辺環境の関係性に関する研究．日本建築学会計画系論文集,(580), 141-147(2004).

A Study of the Interaction with Local Residents and Volunteers in Group Homes for Elderly People with Dementia: A Comparison of Questionnaires from Studies in 2008 and 2012

Misako Noto*, Mayumi Nose**, Kenji Kamijou***,
Yoshihiro Tanigawa****, Takashi Nakamura*****

＜Abstract＞

In this study, we analyzed the changes in the interactions with local residents and volunteers by doing the same questionnaire we did in 2008 for group homes in the same area.
The results showed that interactions with local residents through local events, such as walking or shopping are many. However, visits to group homes have increased.
Many group homes consider accepting volunteers in a positive light, but also, the number of group homes having anxiety about accepting volunteers has increased.
We need to consider the means of interaction with local residents and the incorporation of volunteers in improving the quality of life of elderly people with dementia.

Keywords: elderly people with dementia, group home, volunteers, local residents, questionnaire

* Department of Welfare, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University
** Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba
*** Faculty of Rehabilitation Sciences, Nishikyushu University
**** hatsuratsu day care, OTR
***** Faculty of Education, Fukuoka University of Education